第４回　栗原市総合計画審議会　会議録

日時：令和８年５月１４日（木）
午後１時３０分～午後３時２２分
場所：市役所２階２０５・２０６会議室

１　開会

２　挨拶　栗原市総合計画審議会　会長

新年度になり、行政とか大学は４月からまた新しい動きが始まり、ある意味では一つリフレッシュの時期でもある。

12 月に高校生のワークショップの会場に足を運び、本当に高校生たちの話が初々しく、すごく素敵で、感銘を受けた。

今ちょうど新緑がきれいで、風も心地よく、田んぼに水が張られ、本当に地域の風景が美しい季節になった。

緑に囲まれた柔らかい日差しの中で深呼吸するのは、本当に気持ちがいい。特に栗原に足を運ぶと、この時期はいつもそう感じる。本当に空気が気持ちよくて、吸い込む空気が美味しい、身体に染み渡る感じがする。

今日は４回目ということで、皆さんのお手元には非常に分厚い資料が届いていて、さぞ驚かれたと思うが、それだけこの間、役所の皆さんが本当に頑張って、資料の取りまとめや成果の整理に尽力されてきたと思っている。

そのこともしっかり受け止めながら、今日もこの会議の中で議論を進めさせていただければと思う。よろしくお願いする。

３　報告事項

（１）第２次栗原市総合計画後期基本計画、まち・ひと・しごと創生総合戦略の施策評価（内部評価）結果について（資料１－１～資料１－５）

［将来像Ⅰ］

（委員）

「市民の応急救護能力向上」の評価について、救命講習受講者数が目標未達となっている理由は何か。現在の取り組みとして、例えば小学校や中学校の特定学年で受講を義務づけているとか、あるいは市内の法人に対して受講義務を課しているとか、そういった制度的な体制は何か取られているのか。

自身の学生時代には学校カリキュラムに組み込まれていた。現在もそ

のような取り組みがあるのか。

（事務局）

市民の応急救護能力の向上について、救命救急講習は消防本部で開催し、色々な組織に働きかけ定期的に開催をしていたが、コロナ禍で実施が困難になったことで、コロナ以降も受講者が増えず評価が「低」となった。

成果指標は人口減少時代で受講者が増えていかないと思われるため、見直しが必要と伺っている。

（議長）

今のお話を聞いていて気になったのは、まず、自分たちの身の回りで起きる危険や、生命の危機に対して、いかに一番近い場所で迅速に救出・支援できるか、という視点です。

そのためには、救急車や救急医療、地域の病院といったインフラに頼るだけでなく、もっと身近な地域レベルで、どう生命を守る仕組みをつくるかが重要になると思う。

そうした取り組みは、今のジャンルで言えば、“質の高い暮らしの街を築く”というテーマにもつながっていて、話をされていた内容とも連続しているように感じた。

また、他の項目とも密接に関係していて、「自助、公助、近助」がバックグランドになっている。支援を必要としている人たちへの補助など、さまざまな分野とつながりながら統合的に考えていくことが望ましいのではないかと思う。

（委員）

地域の会議の中で、児童支援や各種補助制度について話し合いがあった。

その際、地区に住んでいるご年配の方々から何かあった時にどうすればいいのか分からないという声をいただいた。

ご年配の方でも分かりやすい、緊急時の対応方法などをまとめた資料を作成していただき、各家庭に配布できればよいのではないかと思った。

（議長）

目配りできるしくみづくり、特に冬場は、ご高齢の方々がご自宅で体調を崩して倒れていても、周囲が気づけないという場合がある。

細目の中でどのように評価されているかわからないが、わかりやすい

マップにするとよい。

［将来像Ⅱ、将来像Ⅲ］

（議長）

子供たちの栄養と体力の話があったが、栄養状態を整えること、体力を構成していくことは若年層の育ちの担保と思う。全体として将来の人材育成にもつながる重要な要素だという点に、しっかり光を当てる必要があると思う。

関連する思春期の教育について、私たちの世代では、経験的に何となく理解できていたことでも、そういう部分が分からないまま過ごしていることもあり、特に女性は、身体の変調に関することを、自分で納得できるように、その年代に応じた説明や共有、共感がきちんとできるということを、見落としてはいけないなと思う。

男子も女子も、その栄養と体力というものをしっかり繋げていければ、それが地域の最大の資源になると思う。

子どもたちは地域にとって最大の資源であり、人としての大切な基盤。大切な資源に光を当てるという姿勢を、行政としても地域としても持っていけると良いのではないかと思う。

（委員）

保健推進員と運動サポーターをしており、高齢者に向けた運動、フレイル予防の対策をしているが、運動サポーターが高齢化しており人数が少ない問題が出ている。高齢者になってからではなく、若いころから体力をつける。運動を教えるシステムが欲しい。

幼児の状態で運動不足も判明している。座って話が聞けない子が多く見受けられる。小さい頃から体幹を整えることや、基礎的な体の動かし方の指導をしていければと思う。それが体に染みついていく。

（議長）

非常に重要なお話。小さい子どもたちの体力不足は深刻な問題。
その問題提起をした上で、実際にそれをどうケアしていくのかは、個々人の意識も大事だが、それを支える行政的なバックグラウンドをどう使っていくのかという視点も必要と思う。

行政の中でも優先順位はあると思うが、こういう問題を今の段階で見落としてしまうと、10 年後、20 年後になって、大きな課題として表面化してくる可能性がある。その辺りはしっかり光を当てながら、今後議論していければいいと思う。

（委員）

子供たちは高校から仙台、古川で学んでいる。そうした中で、地元の高校はどうなのか、外へ出た優秀な子どもたちが、将来的に本当に栗原へ戻ってくるのか、人材流出の観点で不安がある。評価をどのように捉えるかが大事。人づくり、地域づくり、栗原の将来をどうするのかという観点がないといけない。栗原に残りたいと思えるような教育を市全体で考える必要がある。中学校、高校のレベルを上げる工夫があってこそ「高評価」と言えると思う。今の評価が良いと思われると不安に思う。

（事務局）

市といたしましても、その点については同じような問題意識を持っている。公立高校が全県一区となったことや、私立高校の無償化などの影響もあり、子どもたちが地域外の高校へ進学する流れが強くなっている。高校や大学進学を機に地域外へ出たまま、戻ってこないという状況については、危惧している。

人口動態を見ても、転出超過の状況が続いている。そうした中で、築館高校では総合的な探究の時間などを活用し、高校生の視点から市の政策について議論し、さまざまな提案をしていただく取り組みをしている。また、一迫キャンバスや岩ヶ崎高校でも同様の活動を行っている。

卒業式などで市長が話しをする際には、一度地域を出てもよいので、将来的にはぜひ栗原に戻り、栗原市のために働いてほしいという話をしているが、受け皿となる企業、就業の場、生業を起こす起業の土壌がどれだけ育っているか。相対的に考える必要がある。

子供たちは地域の宝。幼稚園、小学校、中学校の段階から学力や地域の愛着も含め、育てていかなければならないと考えている。

そういったところも含めて第３次総合計画の中で検討していきたい。

（議長）

県教育長と話をするが、県立高校の子供をどう育てるかを考えている。いろんなレベルの育成。県立高校は県が考えるが、地域全体の管轄が県でも、市町村が関係できるジャンルを増やす必要がある。

地元の公立高校から大学に進学してきた際、育てて地域に戻してくださいと言われるが、市が受け皿となる魅力をどうつくれるかが直結してくる。

他人事ではない。本人がいろんなレベルで考え、地域に戻ってみてもいいかなと火をつけられるか。自分が参加できる余地があるのか、身に

染みることがあれば戻ってくる。そういった自治体が強い。栗原市もそのようになってほしい。

（事務局）

第 3 次総合計画策定にあたり、若者意識調査を実施。16～18 歳の方、1,454 人に意識調査を実施。その中で、高校生の今後の進路について、市内に残るは 25%、それ以外は市外、県内へ進路選択をしている。栗原市に愛着はあるかという問いには、7 割があると回答している。栗原に住んでいただく施策を総合計画に盛り込むことが大事と考える。

（委員）

人口を確保するにあたり、取り組みがうまくいっているのが流山市。日本で人口増加一位となっている。ターゲットを明確に定めていること。若年層から高齢者まで対象を広げてしまうと、すべての世代に満足してもらえる政策を打ち出すのは非常に難しい。このため、首都圏在住の共働きの子育て世帯をターゲットとして設定し、その層に特化した支援策を行っている。

手っ取り早く明確に目標を絞って具体的な施策を展開していくという考え方、企業のマーケティングのように、自治体運営においても、ターゲットを明確にした施策展開は有効なのではないかと感じた。

（議長）

流山市は尖った作戦。そのような取り組みであっても、最終的には地域全体をどう活性化し、どの範囲まで効果を広げていくのかという視点を、戦略的に考えることが重要。栗原市もマネしても仕方がないが、一方で、行政はどうしても公平性が求められる立場にある。それを乗り越えることができるのは市民の民意。何か気が付いたことがあれば、民意の中で声を上げるもありだと思う。

（委員）

医師招へいなどの項目があるが、特に注目したのは、看護学生への奨学金貸付事業。事業を営む立場としても、人材不足というのは非常に大きな課題だと感じている。その中で、看護学生に対して奨学金を貸与し、その結果として、看護師免許を取得した 31 人が地域の病院に勤務し、看護師確保につながったという点は、本当に素晴らしい。医療の地域にするべきと思う。

（議長）

看護師を目指す学生は多く、看護師の求人はあるが、それぞれの地域や医療機関によって条件が異なり、学生たちはどうしても表面的な条件や目立つ部分だけを見てしまう。だからこそ、さまざまな条件や地域の魅力を丁寧に伝えながら、まずは実際に行ってみようというきっかけを作っていくことが大切。

学生は卒業後のことが明確になっていない。もちろん、使命感を持って看護師になるのだが、実際には、現場を経験しながら少しずつ自分の看護観を形づくっていくのだと思う。

そのため、学生たちが具体的にイメージできるような環境や経験を用意していくこと、そのための条件整備が重要なのではないかと感じている。

［将来像Ⅳ、将来像Ⅴ］

（委員）

資料 1-3 の P.8 の 32 企業支援に関して、総合評価として高評価にした理由を聞きたい。

市民アンケートでも評価は低い。実際に企業支援を受けようとした立場から言うと、コロナ禍の際に新たに起業した事業者への支援はほとんど受けられず、既存企業に対して前年度比などの条件で補助金を配分しているだけのように感じた。新規起業者に対して支援が無かった。

今年になり、支援を受けた事業者の中には、経営や支払いが厳しくなって廃業している。そうした実態がある中で、この項目が高評価とされているのが納得いかない。

（事務局）

資料 1-4 の施策評価シートの 93 ページに、第 2 次総合計画後期基本計画を策定する際に、成果指標として目標値を設定している。その中で創業企業件数については、計画策定時点の現状値として、4 年間で 37 件の創業実績があった。そして、目標としては 5 年間で 50 件の創業を目指すという設定をしている。これに対し、令和 6 年度時点では、3 年間で 56 件の創業支援実績があったため、成果指標上は目標を達成していると判断し、その点をもって評価を行っている。

ただし、委員ご指摘のとおり、市民満足度調査や有識者からの意見などでは必ずしも高い評価ばかりではなく、アンケート調査においても重点改善項目となっている。

今回の評価は、あくまで 5 年前に設定した成果指標に基づく客観的な

数値評価である一方、実際の市民感覚や事業者の実感との間には課題があるという認識も持っている。

そのため、今回実施したアンケート調査や、この審議会でのご意見、さらに今後説明させていただく各種団体からの意見等も踏まえながら、第3次計総合計画では、より実感を伴う形で目標設定や施策づくりを進めていきたいと考えている。

評価方法については、当初ご説明した通り、一定の客観性を保つため、数値や件数の積み上げによって評価を行う必要があったことから、今回は高い評価としている。

いただいた意見については十分理解していることから、第3次総合画にしっかり反映させていきたいと考えている。

（議長）

委員会での議論の進め方や、資料に基づく評価のあり方について、当初設定した評価指標に基づいて、分かりやすく客観的に確認していくことが必要。

一方で、実際に市民の皆さんが感じている満足感や充実感というものは、数値や指標だけでは表しきれない部分もある。

そうした部分も含めて幅広く意見を拾い上げ、それに対する意見を伺うチャンネルを、いかに一体的に作っていくかが重要だと思う。

この委員会での意見も、一つの重要なチャンネル。さまざまな声を統合しながら活用していくことが、地方行政の成長や施策の充実につながる重要な視点になるのではないかと思う。

（委員）

資料7ページの「31 魅力ある支援策の充実と積極的な情報発信」の部分について、ジョブフェアが取り上げられているがアンケート結果などを見ると、十分に情報が届いていない、あるいは関心を持ってもらえていない部分もあるのではないかと感じている。

一方で、情報フェアの参加人数などについては成果指標として高い評価になっておりますが、今後の第3次総合計画では、アンケート結果なども踏まえながら、より若者が定住しやすい施策や、実感につながる施策を検討していただきたい。

もう一点が、同じページの林業に関する部分について、私は木造住宅をテーマに研究しているが、栗原産材、とくに杉材については、住宅建築などで使われている一方で、『栗原産材』としての認知や見せ方が、まだ十分ではないように感じている。

ブランド化という観点では、単に木材そのものだけではなく、「栗原の林業」あるいは「栗原産の木材」そのものを地域ブランドとして発信していくことが重要と思う。

地域にある資源を、地域の中でしっかり活用しながら価値を高めていく取り組みを、ぜひ進めていただきたい。

（議長）

地域資源のブランド化が重要。資料 7 ページに 6 次産業化の話があったが、一次産業・二次産業・三次産業が平等に関わるように考えてしまうと、ハードルが高くなりすぎて、なかなか取り組みに踏み出せないという状況もあるのではないかと思っている。例えば 4.5 次産業など多少間引いても完成度を上げること、組み合わせがよければいいのではないかと思う。

（委員）

栗原市で従業員に高い給料を払える企業になればいいが、域外で稼がないとそういう企業になれない。積極的に域外で稼ぎたくなるような支援が市であると、域外で稼いで雇用につながると良い。

（委員）

観光推進があるが、地方によっては、ある地域では神社にインバウンドが集まるが、栗原市でも目玉の観光地を作ってはどうか。外国人観光客がぞくぞくと来るような、農業など地域体験施設を造り、日本の田舎暮らしが体験できるのがいいのではないか。

（事務局）

栗原市の観光地だと栗駒山が一体の耕英地区、花山地区。それと伊豆沼。あることはあるが、お金を落とす仕組みが必要。滞在してもらわないといけない。お土産があると買っていく。好循環が生まれればいいと思う。6 次産業やブランド化は作るが、売り方がうまくいかない。マーケティングがうまくいけば域外でも稼げる。全部横に繋がっているように考えている。担当部署でもトライアンドエラーを重ねながら、試行錯誤している。

（２）第３次栗原市総合計画策定に係る事業報告について

（資料２－１～資料２－４）

（議長）

総合計画シンポジウムに参加したが、多くの方が来場され、非常に刺激的な議論ができたのではないかと感じている。パネリストの問題意識が非常に具体的で、自身の生業と密接した問題意識を持ちながら、それに基づいた施策や方向性について明確な考えを持ってお話しされていたのが印象的だった。非常に魅力的な議論ができた。フロアからのシャープな意見もあり、会場自体も少し独特な空間で、それも含めて非常に面白い雰囲気だったと思う。

また、高校生の皆さんも多く参加されていて、高校生ならではの視点や発想には、良い意味で予想を超えるような魅力があった。

全体として非常にレベルの高い議論の場になっていたと感じた。

（委員）

民間企業で育ち、企画もしてきた。全ての人に評価されることは絶対に実現しない。いい子は駄目だと思う。

本当に地域を変えていくためには、失敗しないことばかりを重視するのではなく、多少荒削りでも挑戦していけるような考え方を総合計画の中に入れないと、結局いつも無難なものになってしまい、市民から目を向けられないと思う。

栗原には、自然も、歴史も、文化も、さまざまな資源はあるが、良いことをしようとすると、みんな潰される。

多少賛否が分かれるようなことでも、話題になるくらいのものが必要なのではないかと思う。例えば、以前の市長選挙でマクドナルドの話題があったが、マクドナルドそのものを作ってほしいという話ではなく、他の地域ではやっていないようなことを、もっと見える形で議論し、挑戦していくことが大事だと思う。完璧な 100 点の資料はいらなくて、60 点や 50 点で、こんなの本当にできるのと議論になるくらいの方が、市民は目を向けるのではと思う。

総合計画の中にも、市民が目を向けたくなるような、見える形の挑戦をぜひ盛り込んでほしい。

（委員）

栗原市には本当に素晴らしい自然があり、宝の山だと感じている。ただ、その魅力を平均的に広く伝えようとするあまり、特徴がぼやけてしまっている部分もあるのではないかと思っている。

私はキッチンカーで栗原の PR 活動もしていますが、最近ではくりこ

ま夜市が非常に注目されていて、ぜひ来てほしいと案内している。話しを聞くと実際に県外から来られる方がとても多い。そうした盛り上がりを見ると、メディアの力や市民の努力だと思っている。

ただ、その盛り上がりがどうしても特定の季節、例えば夏場に集中してしまい、年間を通じて栗原の目玉がない。

そんな中で最近考えたのが、コストコを誘致できないかということ。

実際、物価高の中でも、多くの人が大きなカートいっぱいに商品を買っていて、県外からわざわざ会員登録のために来る人までいる。自分も利用してみたが、少しだけ買うつもりが、気づけばたくさん買ってしまうような魅力があった。

そこには単なる買い物ではなく、エンターテインメントがあるから。小さな子どもから高齢者まで楽しめて、わざわざ行きたくなる場所。スターバックスも空間を売っていると言われるが、そうした場所が必要なのではないかと思っている。

栗原には自然や文化、農業などの素晴らしい魅力的な資源はあるが、もっとキャッチーなもの、インパクトが必要。

他の委員がおっしゃったように、多少突拍子がなくても、エンターテインメントが、これからの地域づくりには必要だと感じている。

その上で、例えば子育て世代を重点的に呼び込むなど、ターゲットを明確にした政策を打ち出し、その上で医療やインフラ、雇用などを肉付けしていけば、人口増加や地域経済の活性化にもつながっていくのではないかと思っている。

農業のまちとしての軸はブラさずに、ターゲットを明確にすることが必要ではないかと感じた。

（委員）

中学２年生の男の子と、専門学校に通う娘を育ててきた中で、栗原市の子育て支援は本当に素晴らしいと感じている。花山地区は距離的には不便な面もあるが、スクールバスも家の前まで送迎してくれる。

子育て環境が整っているのに、なぜもっと移住や定住につながらないかと感じることがある。今年で花山小学校が休校となるなど、人口減少の現実もある。

市でもPRはしていると思うが、この素晴らしさをもっと上手く伝えられないのかなと感じている。

また、農業について、菌床椎茸を栽培しているが、栗原ブランドの確立が「低」評価でがっかりしている。知り合いの活動も含まれており、認知度が上がっているが結果が伴っていないことが残念と思っている。

私は大きなことはできないが、常に小さなことでも自分にできることはないか考えるようにしている。数打ってとにかくやってみる。やってみてうまくいかないこともあるかもしれないが、それでもまず行動してみることが大事だと思っている。

そうした意識を、市民一人ひとりが心がければよくなっていくと考えている。

（議長）

貴重な話。個々人が周りのことに気を配るというのは、今の時代の中で、少し忘れかけている大切なマインドセットではないかと思う。

少し考えればできることを、いつの間にか見落としてしまい、結果として“都会的な距離感”になってしまうと、地域としての良さも失われてしまう。

だからこそ、そうした閉じた感覚を少し開いていくためのきっかけを提供できることが、地方の魅力の一つだと思っている。自然に声を掛け合えることが、人を勇気づけ、そういう空気を地域の中で作っていければ良いと思う。

また、少し補足すると、高齢者の一人暮らしや、親御さんが一人で生活している状況など、家族として非常に不安を抱えているケースも増えていると感じている。

実際、この委員会でもそうした話を伺うことがあり、本当に胸が締め付けられる思いになることがある。その中で、人の力で支えられる部分もあれば、技術や仕組みで補える部分もあると思っている。

そこをきちんと整備していくことで、家族や地域の負担を少し軽くすることもできるのではないかと思う。それは、大きな予算をかけたキャンペーンよりも、むしろ効果的な場合もある。

企業や行政の皆さんにも、そうした“不安を抱え込まないための仕組み”について、ぜひ研究・導入を進めていただきたいと思う。

それは、この計画の中にある広報や情報共有、防災、地域福祉など、さまざまな分野にもつながっていく話。

そして、そうした課題や気づきというのは、皆さんの日常感覚の中から自然に見えてくるものだと思うので、その声を拾い上げるチャンネルを開いていくことが非常に重要だと感じている。

もう一点、観光について、昔ながらの団体バス観光の形だけでは、これからは難しい時代になっていると思う。むしろ、1 万円の価値を 10 万円分に感じてもらえるような体験を作ることの方が重要。

今の外国人観光客の方々も、日本各地で、そうした地域ならではの体験

や価値を求めており、それに応えられている地域は、一歩二歩先を進んでいると感じる。いわゆる田舎暮らしという表現が適切かは分からないが、新幹線駅があり、少し行けば美しい川や田んぼ、自然が広がっている、そうした環境自体が価値になる時代だと思う。
その価値をどう接続し、ネットワーク化していくかが、これからの地域づくりや観光のデザインにつながるのではないか。
6 次産業化についても、一次・二次・三次産業をどううまく組み合わせていくかということが重要で、どこの自治体も考えていることだとは思う。ただ、実際に具体的な行動まで落とし込めていないために、外から見えにくい部分もあると思う。その中で、栗原市でもまだまだ考える余地が大きいと感じている。
地域には、まだまだ多くのポテンシャルを持った方々がいるため、そうした人たちとの接続を、ぜひもっと進めていただければと思う。

（委員）
　分野別意見交換について、今回の議論の中では、皆さんから本当に貴重なご意見が数多く出されていたと思っている。
これらの意見を一つひとつ見ていくだけでも、栗原市として非常に良いまちになっていく可能性を感じている。
その中で、現段階でも構わないが、第 3 次総合計画に向けて、これはと感じているものがあれば、ぜひお聞きしたい。
　また、それを伺うことで、私たち市民側としても、今後それに向けて何か準備していくべきなのか、あるいは考えておくべきことがあるのか、そうした意味でも、今回皆さんから出された意見に対して、市としてどのような感想や手応えを持たれているのか、お聞かせいただきたい。

（事務局）
　まず重要だと感じているのは、商工・経済団体分野からの総合計画に対する要望に記載している『くりこま高原駅周辺の戦略的整備』と、『若者定着に向けた雇用創出策強化』については、非常に重要な視点だと考えている。
　くりこま高原駅周辺については、現在も話は始まっているが、これから具体化していく段階のため、第 3 次総合計画においてもしっかり位置付けていかなければならないと考えている。
　また、どの団体からも共通して出てきているのが、『担い手の確保』という課題。先ほども担い手の話があったが、例えば資料 2-4 の 3 ページにある『人材・担い手確保』の項目に『集落支援制度』という記載が

ある。
市では現在、地域おこし協力隊を委嘱して活動していただいているが、それと同様に、地域を支援する『集落支援員』を配置し、地域課題への対応や地域づくりを一緒に進めていただいている。
現在も既に活用しているが、今後さらにこうした人材が地域で活動できるようになると、新たな地域の動きや可能性が生まれてくるのではないかと考えている。
そのため、こうした担い手支援や地域支援の仕組みについても、第３次総合計画の中にしっかり盛り込んでいきたいと考えている。

（委員）
ぜひ一つお願いしたいのは、やらないことを決めるということ。
あれもやります、これもやります、と足し算型で計画を作っていくと、結局どれも中途半端になってしまい、結果として誰も動けなくなってしまう。だからこそ、ある程度絞り込むことが必要。
計画にたくさんの項目が並んでいても、多分、市民の皆さんは読み切れないし、理解しきれない。本当にやりたいこと、本当に地域として重点的に進めたいことを、シンプルに、分かりやすく打ち出した方が、市民にも伝わりやすいと思う。
計画自体も、もっとシンプルで分かりやすいものにしてほしい。そうでないと、結局みんな読まなくなってしまうので、その点はぜひお願いしたい。

４　その他
今後のスケジュールについて

（事務局）
次回審議会は８月開催予定。

５　閉会　栗原市総合計画審議会　副会長
本日の審議会は多くの傍聴者の皆さまにもご参加いただいた。心より感謝申し上げる。
総合計画審議会については、今後、第３次総合計画に関わるさまざまな事業が展開されていくことになるが、本日皆さまからいただいたご意見にもあったとおり、地域の将来に対する強い危機感や覚悟を持って、計画を

まとめ上げていかなければならないと感じている。

何とかして第３次総合計画につなげていかなければ、この地域の将来は厳しくなるという思いを共有しながら、今後とも皆さまのお力添えをいただきたいと考えている。

（午後３時２２分）